

5-3 豊かな川の風景のあるまちを育む

(1) まちの景観軸となる川づくり

まちの景観軸となる川づくり

- ①豊かな川の風景づくり
- ②川を中心とした景観づくり

①豊かな川の風景づくり

かつて豊かだった札幌の川の風景を取り戻すために、川自体の魅力を高め、良好な景観をつくり出すことが大切です。そこで、川自体の景観性を十分考えた川づくりを目指します。また、橋や川沿いの道、広場など、川を眺めることができる場所(視点場[※])を設け、川の良好な景観をつくり出すきっかけとなるように検討します。

事業のイメージ：視点場整備

- ・川の風景をつくるためには、人が川に親しみたいという意識を持ち、川を身近に感じることが大切です。このためには、川沿いなどに川を眺める場所(視点場)を設けることも必要です。
- ・そこで、川の特徴を捉えやすい場所(散策路など)に視点場を設けることを考慮します。

●視点場の整備の考え方

視点場は、管理用通路を活用した散策路等の動線と一緒に配置することが必要です。

視点場を整備する場合には、管理用通路を活かした散策路などから水辺や対岸を眺めることができるように、散策路沿いの視点場の配置を検討するなどの配慮が必要です。



■川の視点場(山鼻川:南区)
川沿いのポケットスペースが休憩の場だけでなく、視点場となる

※ 視点場

景観を眺める人の位置(視点)が存在する空間。山や展望台の上からなど広い範囲で存在しますが、本指針では、橋や川沿いの道、広場など川と周辺から川を眺めることができる場所を表します。

②川を中心とした景観づくり

市街地の川の景観は、河川敷地だけではなく、川の周辺も含めて考えることが大切です。

川を意識した暮らし、川を中心とした景観づくりなど、川がまちの表になるよう、川沿いの住民などに川を地域の共有の財産として意識してもらえよう努めます。

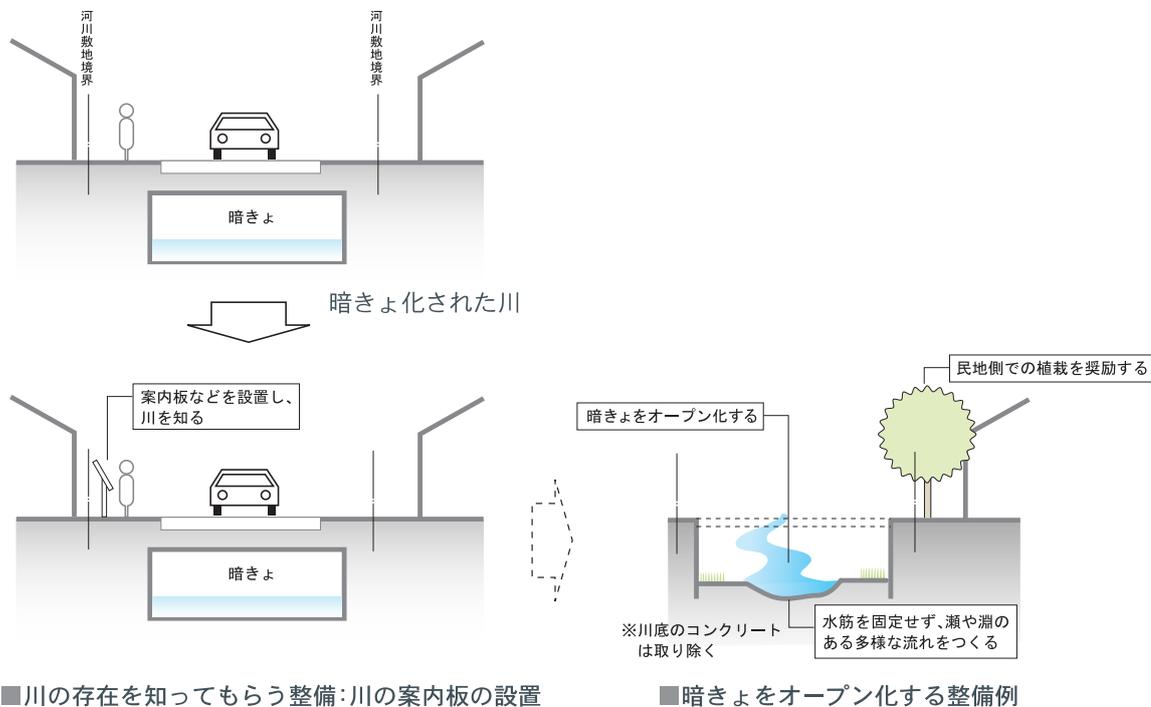
景観づくりが進められるよう、住民参加によって川沿いの植栽や簡単な清掃についてなど「川の作法[※]」が自主的に形成されることを促します。

事業のイメージ：暗きょ化した川の手当て

ふたを閉めたり、管などで地中に埋設されてしまい暗きょとなった河川もあります。こうした河川も上流から下流まで連続した美しい川のある風景とするために川の手当てを検討します。

暗きょ化した河川の上は、道路・公園・遊歩道などになっており、川が暗きょ化されている案内板を設置するなどして、「川を知る」という関わりを促します。また、安易に暗きょ河川を増やさないように努めます。

長期的に考えた場合、暗きょをオープン化し、川としての風景を戻すことも大切ですが、暗きょの上の土地の利用状況も考えた慎重な検討が必要です。



※ 川の作法

川沿いの住民によって取り決める川と人との関わり方に関するマナー。良好な景観形成を行うためのルールづくりもその1つです。